

故 小口登良教授追悼号刊行に寄せて

小口登良専修大学商学部教授は平成22年2月19日に67歳で急逝されました。小口先生は平成21年1月に体調をいったん崩されました。しかし、その年の4月から国内研究員として1年間体調を整える余裕があり、経過も良好ということでしたので、元気に教壇に立てることをまったく疑っておりませんでした。平成21年9月に入り先生より電話があり、9月15日に先生の研究室でお会いしました。

小口先生、今年度国内留学ですが、留学前に体調を崩されて、ある意味今年留学で良かったという状態でした。正式な病名は何っておりませんが、リンパ腺の癌のようです。順調に回復しておられたようでしたが、9月に入り転移し痛みが出たということで、小口先生かなり弱気になっております。

実際に話があるということで、先日研究室でお会いしました。

非常に痩せてしまっていましたので、元気でしたとお伝えするわけにはまいりません。

先生は、来年度病気により、5コマの負担を少し軽減してもらえないかというものでした。

病気による負担軽減は、通常は緊急性のあるものが多かったと前学部長から教えていただいておりますが、小口先生の件については、来年4月にどの程度元気になるかわからないものの、早めに手続きに入って、来年度の時間割編成も軽減を前提としたもので組んでいくようにしたいと思っております。

たとえかなり元気になっても、1年だけは、少しのんびりできるようにしてあげるべきだとの判断でした。

小口先生の病状説明では、4月にはかなり回復しているであろうというのですが、病気の性質上、最悪の場合も1割、2割はありうると考えておく必要もあるかと思えます。

上記は学部内の手続きのために当時の教務委員長に状況を伝えるメール文の引用です。個人名の部分だけ役職名に変えてあります。9月に交替したばかりの新学部長でしたので、小口先生の件については前学部長に連絡を取り、過去の負担軽減の状況や学内手続きなどについてアドバイスを受けています。この時点で小口先生は半年ももたずに自分が死ぬとは夢にも思っていなかったはずで、メールに「病気の性質上、最悪の場合も1割、2割はありうる」と書いている私も、1割、2割のことが本当に起きるとは、そしてこんなに早く起きるとは、文字通り夢にも思っておりませんでした。

結果としてこの日が先生の生田校舎への最後の登校になったと思われます。この日は次年度4月以降の授業負担を軽減してもらえないかというものでした。その後再入院され、最初の段階では全快へ向けての治療でしたが、症状は改善せず、結局授業負担軽減ではなく、長期の欠勤あるいは休職の手続きを考えなくてはいけなくなってしまうわけです。

入院中も痛みがない状態の時はまったくしっかりした状態であったようで、間隔をあけて何度かお見舞いに行った際も、目立って症状の悪化や体力の低下を感じず、絶望的な状況であるとはいえ、症状は安定しているように見えました。

先生から私宛の最後のメール2月11日と、ビジネスインテリジェントコースの教員向けの2月13日のメールは次のようなものです。診断書とは4月以降の手続のためのものです。

内野先生

ご配慮をありがとうございます。

診断書はすでにご覧いただき、私の手元にあります。明日、大林先生がいらして下さることですので、大林先生に託したいと思いますので、どうぞよろしくお願い致します。

少しずつ体力がおとろえていること感じながらも小康状態で、苦しみもなく、痛みもなく過ごしております。

皆様によろしくお伝えください。

小口 登良

BIの先生方。

授業担当等についてのご配慮をありがとうございます。

こんな事態になり皆様にご迷惑をおかけして本当に申し訳なく思っております。これからはいろいろとご迷惑おかけすることになるかと存じますが、どうぞよろしくご協力くださるようお願い致します。

小口 登良

記憶では最後にお会いしたのは私の先生がお亡くなりなる10日から2週間ほど前で、訃報を聞いてこんなにすぐかと思ったのですが、手帳の記録では1月24日が最後のようです。「もう健康になることはない、人生の残りの時間がそれほど多くはない」と先生も見舞う側のわれわれも十分理解した上で、入試が一段落したらまた来ますと握手をしてお別れをしたのが最後でした。

その後も大林先生他、お見舞いにいった先生からの情報で、当然ながらも一度お会いする約束が守れると思っておりました。しかし、最後の時は意外に早く来てしまったのが実感です。

先生の業績、お人柄の紹介については大林 守先生にお願いをしてあります。小口先生とは同じコースの教員として大学では比較的好く話をしていたと思いますが、個人的に話をするのは意外と少なかったかもしれません。先生はご自宅が遠いので、大学の近くにアパートを借りて生田で連続で講義のある日などは泊まられていました。ニュージーランドのワイカト大学の先生で半年間特殊講義に客員教授として何度も専修大学に来られるスティーブン・リム先生を4、5年前に夕食に誘った際に、小口先生に声をかけ、3人で一緒に食事にいったのが思い出されます。

リム先生とは数回ご家族と食事をともにした仲でしたが、2人だけの夕食では会話が持つかまで、英語に堪能な小口先生も同席してくれた方が明らかに良いと思いをかけたわけです。小口先生から、一緒に行ったレストランが気に入って、後日奥様と一緒に食事をされたと聞きました。焼きたてのパンを何種類も出してくれるので、海外からのお客さんを連れて行きやすいお店でしたが、行くたびに客足が落ち、コスト削減かサービスの低下を感じてしまい、最近ほとんど足を運んでいない店になっています。でも当時はぎりぎりまずまずだったはずで、わざわざ食事をされた奥様に楽しんでいただけていたら幸いです。

人はいずれは死ぬ運命であっても、現職の教員を失うのは大いなる痛手です。平均寿命まではまだ間があるし、70歳まで元気に教えるを前提としているわれわれにとって、その前提が崩れるのを間近に見せつけられるからです。大林先生の追悼文にあるように、専修大学で得難い人材であった小口先生が専修大学での任期を全うできなかったことは痛恨の極みです。

小口先生は、大学院商学研究科長として3年（H17.4.1～H20.3.31）、社会知性開発センター運営委員会委員として4年（H17.4.1～H21.3.31）、また、オープン・リサーチセンター整備事業としての中小企業研究拠点「アジア諸国の産業発展と中小企業」の研究代表者（H16.4.1～H21.3.31）を5年努められました。また、商学部においては、現行の三委員会制度を答申した学部改革委員メンバとして、三委員会制度で最初の教務委員長（平成14年度）を努めていただきました。

このたびは専修商学論集として小口先生の追悼号の刊行の運びとなりましたので、専修大学商学部を代表して追悼の辞とさせていただきます。

2010年11月

専修大学商学部長 内野 明